

[第111回藤樹人間学塾のご案内]

皆さま

令和2年11月

NPO法人高島藤樹会



いつもありがとうございます。

本塾は藤樹先生の教えを学び、人間いかに生きるべきかを共に考える形で進めています。

11月もコロナ対策を十分に行って、第110回藤樹人間学塾を開きました。参加者は8人でした。今回は『中庸解』第20章の最終節です。「人一たびこれをよくすれば、己はこれを百たびし、人十たびこれをよくすれば、己はこれを千たびす。…」。

大意について次の様に説明しました。「心の本体をしっかり理解して、深く信じて真の志を立て、他人の百倍も努力をして、人欲等の惑いを除き、本元の良知に至るときは、たとえ愚な者であっても必ず聡明に物事をはっきり知ることができる。柔弱な人であっても必ず強くなる」。

ここで藤樹先生と大野了佐の話をしました。了佐は愚鈍でしたが立派な医者になって人々を救いたいという高い志を持っていました。藤樹先生はその心意気に打たれ了佐のために懸命の指導をされ、了佐も人の百倍の努力をして、最終的には皆に慕われる医者になりました。



そして「致知 2015年1月号」に掲載されたフランスの作家ジャン・ジオノ作『木を植えた男』を紹介しました。ある男が家族を失い、孤独になった後、何かためになる仕事がないと、不毛の地に生命の種を植え付けることを始めた。…その後、カシワの木は10歳になり、豊かな森が出来て涸れていた小川にとうとうと水が流れ、小さな牧場や菜園や花畑が次々に生まれた……。

また「致知 2020年6月号」に掲載された村上和雄氏の「人生百歳時代 日野原医師に教えられた愛の精神」を紹介しました。日野原医師は「人生の目的は愛すること」と語り、自分以外の誰かのために出来ることを考え続けました。そのことが、結果として、氏を愛で満たしてくれたのです。

参加者からは「長野県の森で樹齢300年の巨木の靈気に感動していたら、木を植える男の話が出てきて驚いた」、「日野原医師が命(いのち)は時間である。その時間を人のために使うのが使命だ、と言われていたのには感銘を受けた」、「朝ドラ『エール』でも、諦めなければ道が開けると言っていて共感している」などの意見が出て、盛り上がりました。森の話は共時性ですね。

学ぶは愉(たの)し！人間学に関心のある方はどうぞご参加ください。

■ 日 時 令和2年12月5日(土) 15時～17時

■ 場 所 安曇川公民館(高島市安曇川町田中89)

■ テーマ 「藤樹先生に学ぶ人間学」

テキスト 中江藤樹著・西晋一郎通釈『中庸解・通釈』第21章 p.300～

塾 長 田中 清行 (090-1026-7882)